

多発傾向のカンキツかいよう病防除

昨年、カンキツかいよう病が全県的に多発した。その原因は平成8年8月の台風襲来以降に発病が急増し、有力な越冬伝染源が形成され、9年の台風による風雨や7月の長雨によるものと考えられる。本年も昨年以上に越冬伝染源が多く、多発が予想される(図1)。

かいよう病の防除は、発病した葉や果実の除去、夏秋梢の処理、幼木などのミカンハモグリガ(エカキムシ)の防除、防風対策等、耕種的方法と薬剤による予防を組み合わせ、園内の病原菌密度を下げる事が重要である。

かいよう病の防除薬剤は基幹防除剤として残効性の長い銅水和剤を使用し、応急防除剤としてストマイ剤を使用するのが適当である。また、各種銅水和剤の効果は一律ではなく、最も効果の高い薬剤はICボルドー66Dで、発芽前40倍、5月下旬～7月中旬では80倍で使用する(図2)。なお、銅水和剤は高温時に散布すると、薬害(スターメラノーズと呼ばれる不整形の黒点斑)が発生しやすく、特

に8月以降の散布で急増(図3)し、またマシン油乳剤やジマンダイセン水和剤との混用や近接散布で薬害発生を助長するので、散布にあたっては霧の細かい噴口を用いるなど、注意が必要である。さらに、薬液の乾きにくい多雨多湿条件の散布や過度の連用散布または他剤との混用散布は避ける方がよい。

(病害班 主任研究員 三好孝典)

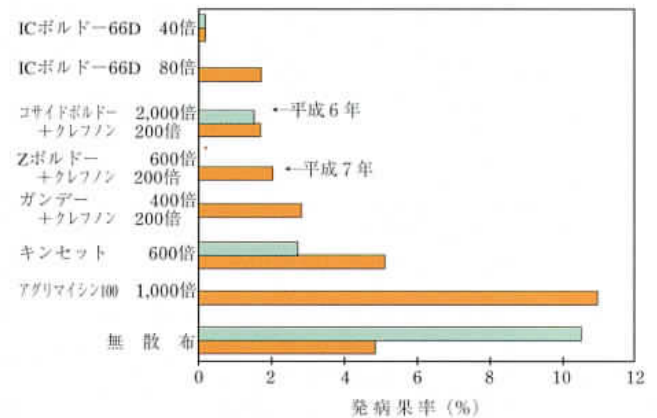


図2 かいよう病に対する各種銅剤の効力比較 (宮内伊予柑)

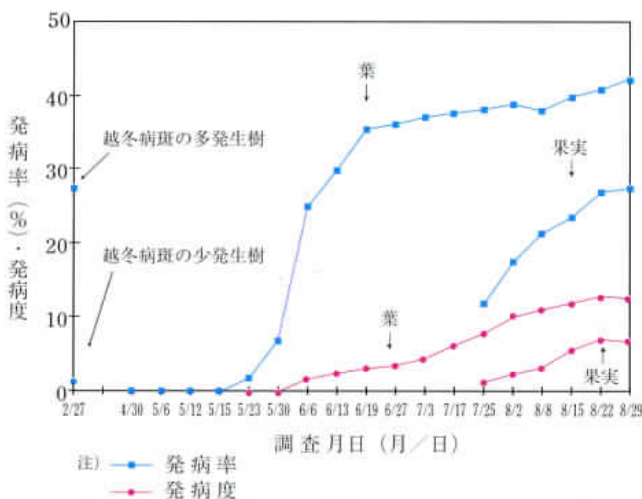


図1 越冬病斑の違いによるかいよう病発生差異 (宮内伊予柑、平成9年)

